

20. 被害地の早期再生手法の開発

(1) アセビ、シキミの生け垣によるシカ食害防止効果について

亀谷行雄

〔目的〕

野生獣類による森林被害、特にシカによる食害が顕在化して、被害地の増加が大きな問題になっている。そこで、植林地へのシカの侵入を少しでも減らして、シカ食害による被害軽減を図るための手法を開発する。

〔方法〕

試験区は、奥多摩町のシカ食害地に設定した。常緑広葉樹のアセビ、シキミを1辺が10mの正方形の形に植え付けた生け垣を2001年6月に造成した。生け垣は、樹種、植栽本数の異なる6種類を造成した(表 - 1)。この6種類の生け垣を試験区1～6とした。さらに6種類の生け垣の中に落葉広葉樹5種を各10本、計50本を植栽した(平成13年度林業試験場年報P. 47～50で既報告)。今回、試験区の食害状況について2002年の秋に調査した。

〔結果〕

造成した6種類全ての生け垣の中にシカが侵入した形跡が見られた。シカは、生け垣として植栽したアセビ、シキミの幹、枝、葉は食害しなかったが、生け垣の中に侵入した時に折損されたとされるアセビ、シキミの枝葉が一部に見られた。生け垣のシカ侵入防止策として、アセビ・シキミを50cm間隔に密植したが、シカが侵入したことから、効果が認められなかった。

生け垣の中に植栽した落葉広葉樹の生存本数は、2002年秋の時点では図 - 1のとおりである。イヌエンジュを除いてキハダ、ミズナラ、ミズメ、カツラは、シカの食害によって、ほぼ全滅状態であった。一方、イヌエンジュは、継続的にシカの食害を受けたが、生存本数は多かった。

アセビ・シキミの生け垣としての効果は、なかったが、アセビは、シカに食害されず、かつ立地環境の悪い場所にも生育できることから、被害跡地の植生回復に利活用できることがわかった。シキミについては、植栽地の立地環境を選ぶことから被害跡地の緑化樹種としては不適であった。

併せて、シカの食害を受けない植生で被害地の再生ができないかと考え、調査したところ樹木の中で高木となるオオバアサガラがシカに食害されないことがわかったので、導入活用できる樹種として検討していく。

この他に、今回の試験で植栽したイヌエンジュは、芽を食害できる高さである1m前後の苗木であったため、葉が開くと、たちまち食害されてしまい、枯死しないまでも、2002年秋の時点で植栽時の樹高よりも伸長することができない状況であった(図 - 2)。このことから、シカが芽を食害できない高さの苗木を植栽することによって、イヌエンジュが被害跡地に導入を図ることのできる樹種であるかを実証する。

表 - 1 植栽時の生け垣の状況

試験区	樹種	植栽間隔 (m)	植栽本数 (本)
1 区	シキミ	0.5	80
2 区	シキミ	1.0	40
3 区	アセビ	0.5	40
	シキミ	0.5	40
4 区	アセビ	1.0	20
	シキミ	1.0	20
5 区	アセビ	0.5	80
6 区	アセビ	1.0	40

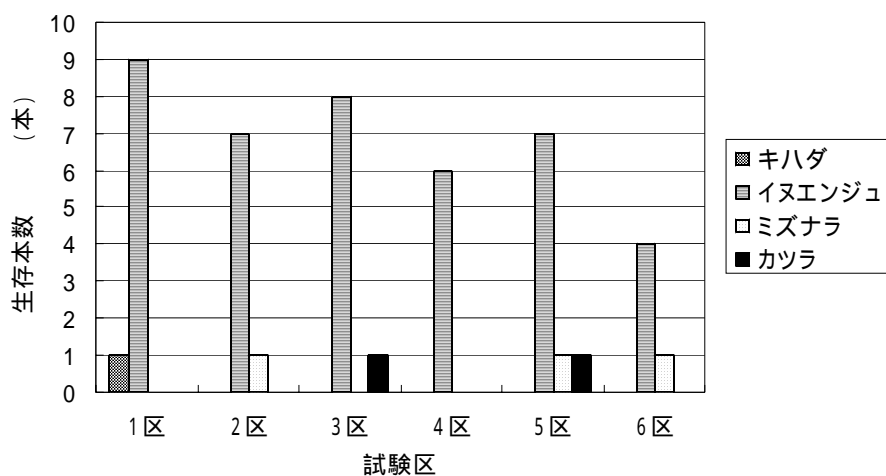


図 - 1 広葉樹木の生存本数

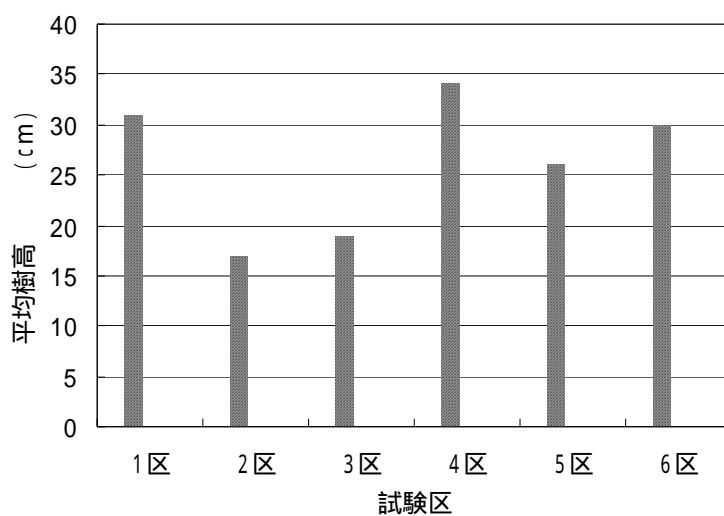


図 - 2 イヌエンジュの平均樹高